The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照 : 対格名詞が事名詞である場合
Author(s)	麻, 子軒
Citation	阪大日本語研究. 2017, 29, p. 43-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60637
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』29（2017）

連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照
―対格名詞が事名詞である場合―

A Contrastive Study of Japanese and Chinese in Transitive Sentences with Inanimate Subjects by Using Theory of Collocation: When the Accusative Case Noun is an Abstract Noun

麻 子軒
MA Tzu-Hsuan

キーワード：無生物主語他動詞文、連語論的アプローチ、コレスポンデンス分析、日中対照、再帰性

要旨

日中両言語における（「行動が意識を変えた／行動改變了意識」のような）無生物主語他動詞文について、それぞれの成立要因とその異同を、連語論的アプローチという方法論およびコレスポンデンス分析という統計手法により分析し、以下の3点を明らかにした。

① 対格名詞を「事名詞」に限定した場合、両言語の無生物主語他動詞文の成立においては、動詞の「再帰性」が共通の要因として働いており、また、各タイプの名詞と結びつきやすい動詞の種類も、その名詞の性質と深く関わっている。

② 日中の共通点として、主格名詞が具体物であればあるほど「風が勢いを増す」のように、目で直接に捉えられるそれ自体の動きを描写する再帰的な結びつきになりやすく、逆に主格名詞が抽象物であればあるほど「核戦争が文明を破壊する」のように、ほかの対象に抽象的な変化を引き起こす非再帰的な結びつきになりやすいことが挙げられた。

③ 日中の相違点として、主格名詞が抽象物の場合、日本語ではほとんど「屈辱が憎悪を生む」のように、それほど影響力がなくても引き起こせる「対象出現」タイプの動詞と結びつく一方、中国語では「理智改造環境（和訳：理性が環境を変える）」のように、より大きな影響力が求められる「対象変化」タイプの動詞と結びつきやすい点が挙げられ、主格名詞の影響力という面において日本語より中国語のほうが相対的に強い傾向が見られた。

1. はじめに

本稿は、日本語と中国語における無生物主語他動詞文を比較し、それぞれの成立要因とその異同を明らかにすることを目的とする。無生物主語他動詞文とは、以下の（1）～（6）に挙げたような、無生物名詞が主語となる他動詞文のことである。

（1） 砂塵が空を覆った。（中津文彦『塙保己一推理帖』）
（2） 沙塵覆蓋了天空。（筆者訳）
（3） ? 鍵がドアを開けた。（熊2009：162）
（4） 鑰匙打開了門。（筆者訳）
（5） 風が音を立てた。（山崎玲子『もうひとつのピアノ』）
（6） ? 風發出了聲音。（筆者訳）

同じ無生物主語他動詞文であっても、（1）（2）のように、日本語と中国語が両方成立するパターンと、（3）（4）・（5）（6）のように、一方のみが成立するパターンとがある。このように、日本語と中国語における無生物主語他動詞文の成立メカニズムは、それぞれ異なるように考えられる。この問題についてはこれまで、名詞（主語と目的語）に注目するアプローチと動詞（述語）に注目するアプローチが採られてきた。その結果、名詞と動詞はどちらも無生物主語他動詞文の成立要因として働いていることが明らかになった。しかし、名詞と動詞の両方を同じ枠組みのなかで扱い、この問題にアプローチした研究は見当たらない。本稿は、名詞と動詞を同時に扱う連語論的アプローチを採用し、日本語と中国語における無生物主語他動詞文の分類を試みる。さらに、その量的分布をもとに、コレスポンデンス分析という統計手法を用いて、両言語の無生物主語他動詞文の異同を明らかにする。

2. 先行研究

無生物主語他動詞文に対するはじめての系統的な考察は、角田（1991）と熊（2009）であった。角田（1991）は、Silverstein（1976）が提案した「名詞句階層」を用いて、無生物主語他動詞文を説明した。名詞句階層とは、名詞を「活動性」の度合いによって分類する概念である。Silversteinによると、名詞は「人称代名詞」「親族名詞」「固有名詞」「人間名詞」「動物名詞」「自然名詞」「地名名詞」という順に活動性が低くなり、かつ、目的語となる名詞と比べて相対的に活動性が高い名詞が、その該当文の主語にもなりやすい。角田（1991）はこれをもとに、無生物名詞が主語であっても、目的語となる名詞に対して名詞句階層が上位にあれば文が成り立つとした。ところが、日本語の無生物主語他動詞文には、（7）のように名詞句階層に違反しているにもかかわらず成立するものと、（8）のように名詞句階層に違反していないにもかかわらず違和感を覚えるものとがある。

（7） 絶望が俊也を襲った。（二条睦『監獄女医』）

（8）？台風が窓ガラスを割った。（熊2009：94）

（7）における無生物主語「絶望」は階層上、目的語「俊也」より低い位置にあるため、名詞句階層理論に違反することになるはずだが、文としては成立する。一方、（8）において「台風」は階層上、目的語「窓ガラス」より高い位置にあるため、名詞句階層のルールを守っているにも関わらず、不自然さが感じられる。このように、（7）（8）はどちらも名詞句階層では説明できない用例であり、名詞句階層説の限界を示すものである。

これに対し、熊（2009）は「他動性」という異なる観点を取り入れてこの問題を説明しようとする。熊は、まず無生物主語他動詞文を「所属関係の文」と「非所属関係の文」とに分け、さらに「非所属関係の文」を「能動的な文」と「受動的な文」とに分ける。「所属関係の文」とは、（9）のように、主語と目的語が同一の実体である文、つまり再帰的な構文のことを指している。一方、「非所属関係の文」とは、文字通り「所属関係の文」ではない構文を指しているが、その下位分類として、（10）のような一般的な「能動的な文」と、（11）のように述語が語彙的な受身動詞の「受動的な文」とが挙げられる。

（9）　懐かしい建物が姿を消した。（熊2009：113）
（10）　強烈な陽がしだれ桜を照らしている。（熊2009：140）
（11）　しだれ桜が強烈な陽を受けている。（熊2009：140）

熊は以上の3種類の構文に対して、「受動的な文」と「所属関係の文」は見かけ上他動詞文の形をとっているだけで、実際には述語の他動性が低いため、活動性をそれほど強くもたない無生物名詞でも主語に立つことができ、無生物主語他動詞文として成立しやすいと主張した。ところが、述語の他動性が高い「能動的な文」に関して、なぜそれが無生物主語他動詞文として成立するのかについては説明できず、結局「能動的な文」を述語が有対他動詞をもつかどうかによっていくつかのグループに分類するだけに留まり、他動性をもっても無生物主語他動詞文の成立に対して一貫性のある説明を与えることができなかった。

以上概観したように、角田と熊は「名詞句階層」と「他動性」という説明原理を提出した点において、無生物主語他動詞文の研究に大きな貢献をなしたが、文の一部である名詞か動詞かの一方しか見ないところに問題があるものと思われる。無生物主語他動詞文の成立は単に名詞か動詞か一方だけの問題ではなく、両者が互いに影響し合うものだと考えられる。本稿では、名詞と動詞を同時に扱う連語論的アプローチを採ることによって、日中両言語の無生物主語他動詞文の成立要因とその異同を明らかにしたい[1)]。連語論的アプローチには、日本語と中国語

との２つの言語を連語論という同じ枠組みのなかで論じることができ、対照研究が可能になるという利点もある。

3. 用語の規定

本節では、本稿のなかでも特に重要ないくつかの用語を詳しく規定する。以下、「無生物」「主語」「他動詞」の3語について述べる。まず、「無生物[2)]」とは人または動物でないものを指し示すもので、「有生物」の反対の概念である。『分類語彙表』（国立国語研究所 2004）の分類項目で言うならば、「抽象的関係」「人間活動―精神及び行為」「生産物及び用具」「自然物及び自然現象」に属するものが「無生物」に当たる。ただし、「自然物及び自然現象」の下位分類にある「生物」「動物」は「有生物」に属する。中国語では『分類語彙表』のような厳密なシソーラスはないが、日中両言語に限れば意味の分類項目と判断基準が大きく変わることはないと思われるため、中国語の「無生物」に対する定義も日本語と同じ基準で規定を行う。なお、上記の定義では、植物も「無生物」として認めることになる。

次に、日本語の「主語」に関しては、類似した用語に「主格」が挙げられるが、角田（1991）によると、「主語」は名詞などが文中でどのような役目をするかを表わす「文法機能レベル」のもの、「主格」は名詞などに現れるまたは付けられる形を表わす「格レベル」のものであり、両者はそれぞれ異なるレベルのものに属する。これまでの研究において、無生物主語他動詞文の構成要素は「主語」「目的語」などの用語で記述されてきたが、5.1 節で述べるように、連語論的アプローチは「主語」「目的語」のような文法機能レベルのものを論じる理論ではないため、本稿では「主格名詞」「対格名詞」といった格レベルの用語を用いる。厳密には「主語」と「主格名詞」が指すものが同一でない場合もあるが、本稿で対象にする他動詞文の用例は、「ＸガＹヲＺ」のように、「主語」が「主格」で示されたものに限定するため、「主語」と「主格名詞」は実質上同じものを指し示すことになり、記述に矛盾は生じないと思われる。一方、中国語の場合も基本的には日本語と同じで、「主語」となるものは「主格名詞」と記述する。

最後に、本稿において、日本語の「他動詞」に対する規定は、奥津（1967）に従い、原則として「ヲ格」をとる動詞とする。「走る」「通る」のような移動動詞や、「出る」「離れる」のような離脱動詞がとる「ヲ格」は「目的格」ではないため、これらは他動詞ではなく自動詞として認める。一方、中国語の「他動詞」の定義に関しては、趙（1979）に従い、原則として目的語をとる動詞とするが、「來（和訳：来る）」「去（和訳：行く）」のように、目的語をとるにもかかわらず「存在」「出現」「消失」の意味合いをもつものは自動詞と認める。

4. 調査対象と調査資料

本稿の調査対象となる無生物主語他動詞文とは、以下のものである。日本語の場合は、「行動が意識を変える」のような「（ガ格の）主格名詞＋（ヲ格の）対格名詞＋他動詞」という文構造を指す。ただ、「**選手の**動きがスピードを増す」「ストレスが病気を悪化**させる**」など、名詞に連体修飾成分が付く場合や、動詞に有標のヴォイス形式が付くものは他動性に影響が出るため除く。また、「鎖鎌が勢いを**増して**廻る」のように、他動詞文が連用節に当たるものも調査対象から外す（連体節中の他動詞文は対象に含める）。中国語の場合は、「行動（和訳：行動が）＋改變（和訳：変える）＋意識（和訳：意識を）」のような「主格名詞＋他動詞＋対格名詞」という文構造を調査対象にする。日本語と条件を合わせるために、名詞に連体修飾成分が付くものや、動詞に有標のヴォイス形式が付くものもすべて除く。なお、本稿で調査対象とした文構造は日中とも、主格名詞・対格名詞・他動詞の結びつきの間にほかの単語が介在していないものに限っているが、このような制限を設けた理由は、日本語と中国語との両言語は構造が異なるため、他動詞文のなかにほかの単語の介在を許すと、片方の言語構造だけに依存する要因が現れる可能性があり、適切な対照研究を行うことが困難になるからである。

調査資料は、日本語・中国語ともそれぞれの大規模コーパスを用いて例文を抽出する。日本語のコーパスは国立国語研究所のプロジェクトによって構築された「現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下BCCWJ）」を利用する[3)]。BCCWJは、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスであり、書籍、雑誌、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルから抽出された1億430万語を収めている。収録対象の刊行年代は1976～2005年である。中国語のコーパスは、台湾の中央研究院で構築された「現代漢語平衡語料庫（以下SINICA）」を調査資料とする[4)]。SINICAは、BCCWJと同じく、言葉の使用実態を反映させるために作られた均衡コーパスで、520万詞（中国語の単語に相当する）を収録しており、その内容は1981～2007年の文章である。サブコーパスは新聞、雑誌、書籍などが含まれている。本稿では、用例数を増やすことを目的に、日中両言語ともすべてのサブコーパスを対象に用例を収集するが、どちらも均衡コーパスであるため、両言語の使用実態を比較するのに問題はないと思われる。もちろん、両コーパスの均衡性はすべてのサブコーパスにわたって担保されているわけではないが、例えばBCCWJの書籍の場合は実際に出版された書籍の推定総文字数と日本十進分類法（NDC）の関係をもとに母集団の選定を行うなど、それぞれのサブコーパスのサンプリングには統計的な裏付けがあるため、敢えてすべてのサブコーパスを使用することにした。そのほか、BCCWJとSINICAを選定した理由は以下の3点がある。1点目は、収録する資料の刊行年代が近いため、共時的な対照研究に適していることである。2点

目は、形態素解析が施されているため、検索の精度が上がるということである。3点目は、作者や出版年月などのタグが付いているため、後処理にも利用しやすい点が挙げられる。用例の抽出にあたっては、BCCWJもSINICAも自作のPerlプログラムで行った。なお、今回の調査対象には翻訳文が含まれているが、実際に翻訳文を含めたデータと除いたデータの傾向を比較し、翻訳文は結論を変えるほどの影響力をもたなかったため、分析対象に入れることに支障はないと判断した。

5. 理論の枠組み

5. 1. 連語論的アプローチ

言語学研究会（1983）によれば、「連語」とは「従属的な結びつきに基づく、2つあるいは3つの単語の組み合わせ」のことである。本稿では、無生物主語他動詞文も特定の名詞と動詞との結びつきによって分類できると想定し、「主格名詞[5)]」「対格名詞[6)]」「動詞」の3つの単語の組み合わせの関係を考える。断っておきたいのは、本稿の研究対象は無生物主語他動詞文という「文」レベルのものだが、3節でも述べられたように、調査対象とする「ＸガＹヲＺ」という構文は、「主語」が「主格名詞」で示されたものに限定するなどの工夫をしたため、本稿に限って言えば連語レベルでの「主格名詞」「対格名詞」「動詞」が実質上それぞれ文レベルでの「主語」「目的語」「述語」と1対1の対応関係をなしていると言える。したがって、「文」の研究に「連語」の枠組みを用いることに問題はないと思われる。

ただ、言語学研究会は従属的な結びつきのみを連語と認め、主格名詞による結びつきは陳述的な結びつきとし、連語論の対象として認めていない。これに対し、鈴木（1983）、仁田（1985）、宮島（2005）は、主格名詞による結びつきは主語と述語という機能的な関係だけでなく、名付け的なレベルでの関係をも担っているため、連語として扱うべき側面もあると述べている。また、この立場を受け継いだ連語論の研究に森山（1988）がある。本稿での連語論は、主格名詞による結びつきも連語として認めた後者の立場に従う。ただし、動詞に対する分類は、言語学研究会の記述を一部参考にした。

本稿で用いた「連語論的アプローチ」という用語も、森山（1988）によって提示されたものである。森山の連語論的アプローチは、格の類型を分析するのに用いられたものだが、基本的な考え方は言語学研究会にその多くを拠っている。具体的な分析の方法として、言語学研究会は格助詞ごとにそれと結びつく動詞との関係を見るのに対し、森山はさまざまな格のパターンを最初から設定した後、格のパターンごとにその連語論的な意味を見る点においては異なるが、「連語的な意味＝構造的に縛られた意味」という中核的な概念はどちらも同じである。

5. 2. 連語論の適用範囲

連語論では、(12)(13)のような「慣用的な言い回し」は研究対象として認めないため、本稿でもこのような用例を除外する[7)]。

(12)　ミステリですから、「次はどうなるのか？」という興味が**後を引いて**どんどんページをめくるというのですね(田中貴子『古典がもっと好きになる』)

(13)　一年間の採石場暮らしで毒がまわり、脱走の重労働が**止めを差し**、どこかの山の中でひっそりと息絶えているのではと。(沢村凛『瞳の中の大河』)

これらは、単語と単語の結びつきが自由でなく、非恣意的な面が強く、またその言語の文化による影響も大きい。上記の2例では、「後を引く」と「止めを差す」はその事柄を描写するというより、慣用的にほかの意味に変化しているといったほうが適切である。

以上の理由から、本稿は「慣用的な言い回し」を別扱いし、まずは組み合わせが自由な結びつきから出発して、無生物主語他動詞文の成立要因を明らかにすることを試みる。言語学研究会によれば、対格名詞と他動詞との自由な組み合わせには、「対象への働きかけ」「所有の結びつき」「心理的なかかわり」の3類があるが、本稿では、もっとも基本となる「対象への働きかけ」から考察を始める。また、「対象への働きかけ」はさらに対格名詞によって「物に対する働きかけ」「人に対する働きかけ」「事に対する働きかけ」に分けられるが、5.4節で後述するように、「物に対する働きかけ」に関してはすでに麻(2016)で行っているため、本稿では「事に対する働きかけ」に焦点を当てたい。ただ、「屈辱が**憎悪**を生む」のように、出現動詞による結びつきでの対格名詞は、現れるまでには存在しないため、それに対して働きかけることも不可能である。誤解を招くおそれがあるため、本稿では「事に対する働きかけ」の代わりに「対格名詞が事名詞の場合」で記述を行うことにする。

なお、言語学研究会(1983：276)では、「する」「はじめる」「つづける」「おわる」といった典型的な機能動詞[8)]と思われるものによる結びつきを研究対象から除外しているが、本稿でもその規定に従う。しかし、ここで特に注意すべきは、「葉が日焼けを起こす」のような、「起こす」という動詞による表現である。この動詞は、全体的な結びつきが「葉が日焼けする」に置き換えられることから、1種の機能動詞のように思えるが、「上体を起こす」が言えるように、「起こす」には実質的な意味をもった本来の用法が存在しており、「する」のような具体的な用法をもたない典型的な機能動詞と区別される。加えて、連語論的アプローチは本来、具体から抽象へと派生していく体系を想定している理論であるため、本来の意味と抽象化された意味を同時にもつ「起こす」を扱うことに意義があると思われる。実際、言語学研究会(1983：76)

では「起こす」を例に、具体動詞から抽象動詞へ移行する過程を説明している上、記述のなかにも「痙攣を起こす」のような、「日焼けを起こす」と同類のものが見られる。以上の理由により、本稿では「起こす」という動詞による結びつきも調査対象に含めることにする。次節では、本稿で扱う「主格名詞」「対格名詞」「動詞」のタイプについて説明する。

5. 3. 主格名詞のタイプ

本稿では主格名詞を、物理的に実体を備えているかどうかによって、まず「具体物」と「抽象物」の2種類に分ける。次に、「具体物」を主格名詞の本来の性質によって、「自然物」「物質」「機械」「身体」「植物」「道具」の6類に下位区分される。定義と例文は以下に示す。

- 自 然 物：　雨、風、雷、太陽のような、自然の力をもつもの
  例　　文：　**風**が勢いを増す（浅倉卓弥『雪の夜話』）
- 物　　質：　アルコール（の成分）のような、物質の内在的性質を指すもの
  例　　文：　**アルコール**が薬効を弱める（桝淵幸吉『薬の養生訓』）
- 機　　械：　深度計、トラックのような、動力源をもつ機械
  例　　文：　**深度計**が故障を起こす（遠藤織枝『戦時中の話しことば』）
- 身　　体：　心臓、神経のような、身体の一部に属するもの
  例　　文：　**心臓**が発作を起こす（ロバート・ウィルスン『セビーリャの冷たい目』）
- 植　　物：　花、葉、海藻のような、植物に属するもの
  例　　文：　**海藻**が根腐れを起こす（高田宏『にっぽん風景紀行』）
- 道　　具：　鍵、スキー板、ブレーキ管のような、人間が用いる道具類
  例　　文：　**ブレーキ管**が空気漏れを起こす（石本祐吉『製造現場をたずねる』）

一方、「抽象物」はさらに人間活動によるものかどうかによって、「抽象的関係」と「人間活動」の2種類に分ける。「抽象的関係」とは、現実の世界に存在する物事の内容や属性などに関する部分で、「事柄」「作用」「時空」「様相」の4類に下位区分する。

- 事　　柄：　事件、問題のような、現実に起きた出来事を表わすもの
  例　　文：　**ロッキード事件**が話題を呼ぶ（大島渚『大島渚1960』）
- 作　　用：　降雨、爆発のような、物理的に働きかける力をもつもの
  例　　文：　**降雨**が土砂崩壊をもたらす（大矢雅彦『自然災害を知る・防ぐ』）

● 時　　空：　一秒、一年、距離のような、時間または空間を示すもの
　例　　文：　**距離**が恋愛を左右する（唯川恵『彼女は恋を我慢できない』）
● 様　　相：　混乱、秩序のような、物事の存在の仕方を表わすもの
　例　　文：　**混乱**が進歩を生む（ダン・S・ケネディ『悪魔の法則』）

そして、「人間活動」とは、人間による精神や行為そのものなどを指し、「心理活動」「生理活動」「具体行為」「経済活動[9)]」「言語文書」「思想学問」の6類に下位区分する。

● 心理活動：　嫉妬、不安、想像、思考のような、人間の感情・知的活動
　例　　文：　**嫉妬**が興奮を呼ぶ（亀山早苗『男と女…』）
● 生理活動：　呼吸、脈拍のような、人間の身体に起きるさまざまな現象
　例　　文：　**呼吸**が万病を癒す（栗田勇『白隠禅師の読み方』）
● 具体行為：　攻撃、戦争のような、常に具体的な動作を伴う人間の行動
　例　　文：　**戦争**が激しさを増す（嘉門安雄『高校美術3』）
● 経済活動：　貿易、投資、供給のような、経済に関係する人間の行動
　例　　文：　**貿易**が環境悪化をもたらす（嘉治佐保子『経済学の進路』）
● 言語文書：　評判、噂、ドラマのような、言葉として表現されたもの
　例　　文：　**噂**が噂を呼ぶ（山室恭子『黄金太閤』）
● 思想学問：　宗教、主義、政策のような、人間の知的活動による生産物
　例　　文：　**宗教**が中世を創る（堺屋太一『知価革命』）

5. 4. 対格名詞のタイプ

本稿では、言語学研究会の記述を参考に、対格名詞を「物名詞」「人名詞」「事名詞」の3類に分ける。例を挙げると、それぞれ「鍵が**ドア**を開ける」の「ドア」、「絶望が**俊也**を苦しめる」の「俊也」、「共産党が**勢力**を拡大する」の「勢力」である。ただ、5.1節でも説明したように、無生物主語他動詞文の構成要素には、主格名詞・対格名詞・動詞の3つがあるが、この3つの変数を同時に扱うのは技術的にも記述的にも困難である。そのため、本稿では変数の1つである対格名詞を「事名詞」に限定し、この条件の下で、主格名詞と動詞との2つの変数の関係を観察する。なお、「物名詞」に限定した検討はすでに麻（2016）で行っている。「人名詞」については用例数が少ないために今後の課題としたい。

5. 5. 動詞のタイプ

対格名詞を「事名詞」に限定したため、それに伴う動詞もすべて抽象的な動作を表わす動詞であるが、そのほとんどが具体的な動作を表わす動詞から抽象化したものである。また、「言葉を**振り回す**」や「非を**投げかける**」のような、動詞の意味が完全に抽象化されておらず、比喩的に使用されたものは連語論の規定上対象外とするが、注7）で述べたように、今回収集した用例には見当たらない。分類項目に関して、言語学研究会の記述を参考にし、「対象変化」「対象出現」「再帰変化」「再帰出現」の4項目に分ける。以下にその定義と例文を挙げる。

- 対象変化：　主格名詞とは別に存在する物事の動きや状態に変化を起こす動詞
  例　　文：　思考が現実を**変える**（海野弘『世紀末シンドローム』）
- 対象出現：　主格名詞とは別に存在する何らかの状態を出現させる動詞
  例　　文：　ポイ捨てが公害を**生む**（波勝一広『スリランカで午後の紅茶を』）
- 再帰変化：　主格名詞自身にある動きや状態に変化を起こす動詞
  例　　文：　戦争が激しさを**増す**（嘉門安雄『高校美術3』）
- 再帰出現：　主格名詞自身に何らかの状態を出現させる動詞
  例　　文：　キリスト教が大分裂を**起こす**（佐々木毅『宗教と権力の政治』）

「対象」と「再帰」は、厳密には動詞の性質によるものではなく、対格名詞が主格名詞に属するかどうかに由来するものだが、本稿では統計の手法上、対格名詞を1種類に固定しなければならないため、両者の区別を動詞の分類で表わすことにする。これにより、動詞の分類が2種類から4種類に増え、コレスポンデンス分析を適用する意義が大きくなる利点もある。

6. 調査結果

前節の分類基準に基づき、得られた用例を集計すると表1のような結果となる。主格名詞に関する分類項目のラベルは文字数が多く、後に散布図で示すときに見にくくなるため、「具体物」の3番目の下位分類である「身体」を「G3」とするように、上位分類の頭文字と下位分類の順番で書かれた記号をラベルの先頭に加えておいた。今回の調査で得られた用例の数は、日本語が598例、中国語が353例となっている。全体的に見れば中国語よりも日本語の用例が多いが、これより適用する統計手法は相対的な関係を見る解析方法であるため、比較するデータの数に差があっても問題ないと思われる。以下は日本語と中国語の2つの節に分けて、主格名詞と動詞との結合傾向をそれぞれ考察する。

表1　無生物主語他動詞文の用例数

主格名詞 ＼ 動詞	対象変化		対象出現		再帰変化		再帰出現		合計	
G1 具体物（自然物）	2	3	2	9	17	4	3	1	24	17
G2 具体物（物　質）	25	18	11	4	2	0	12	1	50	23
G3 具体物（身　体）	0	0	7	3	7	0	35	10	49	13
G4 具体物（機　械）	0	0	2	3	13	1	13	2	28	6
G5 具体物（植　物）	0	0	1	0	0	0	3	1	4	1
G6 具体物（道　具）	7	5	4	2	5	2	6	2	22	11
T1 抽象的関係（事柄）	4	2	8	9	0	0	0	1	12	12
T2 抽象的関係（作用）	0	3	8	0	2	0	0	0	10	3
T3 抽象的関係（時空）	6	9	2	5	5	0	5	16	18	30
T4 抽象的関係（様相）	15	6	16	3	2	5	0	14	33	28
N1 人間活動（心理活動）	9	9	44	4	1	0	3	4	57	17
N2 人間活動（生理活動）	2	3	8	11	1	0	1	0	12	14
N3 人間活動（具体行為）	34	38	37	21	9	2	9	5	89	66
N4 人間活動（経済活動）	19	10	48	7	18	4	5	19	90	40
N5 人間活動（言語文書）	8	13	27	7	2	2	3	2	40	24
N6 人間活動（思想学問）	25	24	12	19	7	1	16	4	60	48
合　計	156	143	237	107	91	21	114	82	598	353

（各行左のマスが日本語、右のマスが中国語）

6. 1. 日本語の結合傾向

表1のクロス集計表だけでは主格名詞と動詞との結合傾向が観察しにくいため、本稿ではコレスポンデンス分析という統計手法を導入し、全体の結合傾向を探る。コレスポンデンス分析は、多変量解析の一種で、フランスのBenzecriによって1960年代に提唱された質的データの解析方法である。その主な目的は、分析対象となる複数の変数がもつ情報をできるだけ少ない次元に要約し、それらを2次元の散布図に表わして、その座標の相対的な位置を手掛かりに変数の特徴を明らかにすることである。本稿でコレスポンデンス分析を行うために使用した統計ソフトウェアはR[10]である。表1の日本語の部分に当たるデータをRのcorresp関数で解析し、その結果は図1の散布図である。なお、表1のデータの場合は、理論的に3つの次元の解を得ることができる[11]が、第2次元までの累積寄与率が81.57%と、8割を超えているため、第2次元まで見ればおおよその傾向が分かると判断し、第3次元は検討しないことにする。

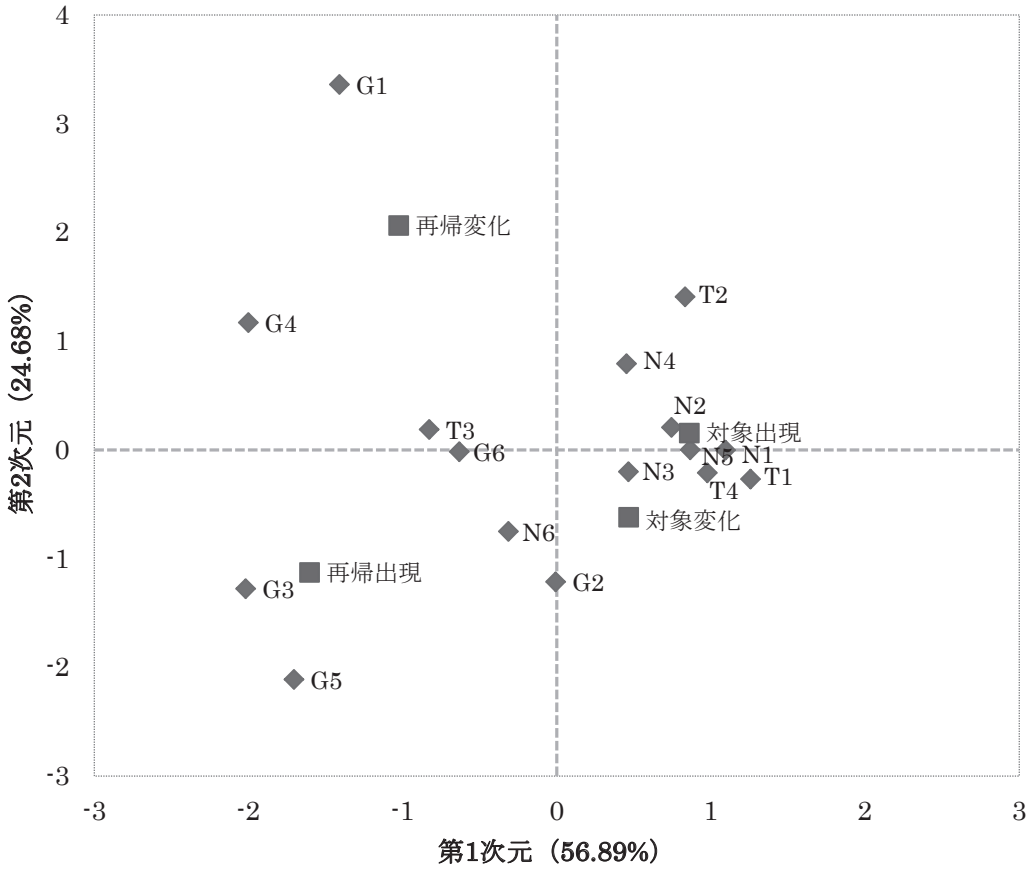

図1　日本語の散布図（第１次元と第２次元）

コレスポンデンス分析は、主成分分析などと異なり、パターンの分類が主な目的であるため、軸（次元）の解釈が難しい場合がある。しかし、今回のデータで得た散布図ではある程度の傾向が観察できたため、以下、軸（次元）の解釈を試みる。まず、動詞のタイプ（第1アイテム）に注目したい。図1を観察すると、横軸（以下第1次元）では「再帰変化」「再帰出現」が座標上の左側、負の方向に位置するのに対し、「対象出現」「対象変化」が右側の正の方向に位置するのが分かる。ここでは、具体的に言えば、「再帰変化」「再帰出現」は何らかの性質がマイナスであり、その同じ何らかの性質が「対象出現」「対象変化」においてプラスである、ということを意味している。動詞のラベルが手掛かりにもなっているが、この何らかの性質は動詞の「再帰性」を表わしていると思われる。つまり、軸の左側に再帰的な結びつき、そして右側に非再帰的な結びつきが並ぶ傾向になっている。

実際に主格名詞別にそれぞれの再帰的な結びつき（「再帰変化」と「再帰出現」による結びつき）が占める比率を検証すると、もっとも左側にある「G1具体物（自然物）」「G4具体物（機械）」「G3具体物（身体）」「G5具体物（植物）」は7～9割になっており、真中辺りの「T3抽象的関係（時空）」「G6具体物（道具）」「N6人間活動（思想学問）」「G2具体物（物質）」は3～5割、そしてもっとも右側に集中しているグループはどれも2割以下になっていることが分かった。以上のように、第1次元は「再帰性」の程度を表わし、「再帰性」が強いものほど軸の左側に並んでいることが、再帰的な結びつきの割合を観察することで確認できた。

次に、主格名詞のタイプ（第2アイテム）にも注目しながら、動詞のタイプとの関係を観察する。図1を見ると、左側の再帰的な結びつきに寄っている主格名詞は、ほぼ具体物が占めている一方、右側のほうは人間活動を含む抽象物がほとんどだという傾向が見られた。表1の実数のデータも散布図と同じ傾向を示している。では、なぜ抽象物よりも具体物のほうが再帰的な結びつきになりやすいのか。実際に再帰的な結びつきの用例を見ながらこの問題に対する答えを探ろう。まず、主格名詞が具体物の場合、その対格名詞は主として（14）～（18）の「氾濫」「勢い」などのように、主格名詞から直接に観察できる動きや状態、または目に見える特徴である。その理由は、主格名詞自体が具体物であるため、再帰的な結びつきを作る際に、その側面となる対格名詞も実際に観察しやすいものがなるのが普通だからであろう。

（14）　数年前の集中豪雨のさいに、三井の森ゴルフ場下で**川が氾濫を起こし**、何戸かが流された事件を指摘している。（加藤久晴『傷だらけの百名山』）

（15）　奥の小山へと目を向けると不意に**風が勢いを増した**。地表の雪が舞い上がり視界が五メートルにも満たなくなった。（浅倉卓弥『雪の夜話』）

（16）　**プロペラが回転速度をあげた**。機は滑走しはじめた。シュトルヒは、ほどなくふわりと舞い上がる―東の空に消えていった。（草薙圭一郎『時空戦艦「大和」』）

（17）　寝不足が続いていたある朝、鏡を見たら、左の頬が腫れていた。**歯ぐきが炎症を起こした**らしい。（阿木燿子『ちょっとだけ堕天使』）

（18）　ガラス窓を開け放したとき、さし込んでくる日光の強さを半分にしないと、**葉が日焼けを起こし**、生育が悪くなる。（江尻光一『洋ラン栽培コツとタブー』）

それに対し、主格名詞が抽象物の場合は、そもそもそれが実体を備えているものではないため、再帰的な結びつきを作る際にその側面となる対格名詞も（19）（20）の「（知識の）不確実性」「（対策の）重要性」のように、目を通して観察しにくいものに限定されており、選択肢も具体物のそれに比べて非常に少なくなっている。下の2例では、（14）～（18）のように、目

に見える対格名詞をとることが困難だと思われる。

（19）　**知識が不確実性を増し**流動化する時代においては、決まった知識を暗記し詰め込むだけの教育は意味をなしません。（佐藤学『教養教育は進化する』）

（20）　少雨傾向の進む中，異常渇水が常態化する傾向にあり，**異常渇水対策が重要性を増している**ことは間違いない。（伊藤達也『水資源政策の失敗』）

ただ、実数のデータでも示されている[12]が、抽象物のなかでも「N3人間活動（具体行為）」「N4人間活動（経済活動）」といった、再帰的な結びつきを作る能力をもつものがある。その理由は、このタイプの主格名詞は（21）（22）のように常に具体的な行動を伴うものや、（23）（24）のように数値で量化できるものなど、抽象的な概念とはいえ、目を通して間接的にその動きや状態などの特徴を捉えることができるからだと思われる。なお、「N6人間活動（思想学問）」タイプの主格名詞も再帰的な結びつきを多数作っているが、これについては別の理由によるものだと思われ、詳しくは第2次元で説明する。

（21）　**弾圧が苛烈さをます**一方、党内の中枢部に入ったスパイによって、資金づくりのための銀行ギャング事件が起き…（沢地久枝『昭和史のおんな』）

（22）　その謂れは、昭和一九年、**太平洋戦争が激しさを増し**、勝敗の行方は大体決した頃のことである。（マイク濱田『ドリアンの歌』）

（23）　後場に**日経平均株価が下げ幅を拡大する**展開となったことや、ラ・パルレが前期の計算書類について監査人の意見不表明を発表する…（Yahoo!ブログ『ビジネスと経済』）

（24）　円高の進展等にもかかわらず、**物価が安定基調を維持する**中で、内需を中心として景気が回復から拡大に向かった一年でありました。（衆議院『会議録』第112回）

また、散布図の左側に寄っている「T3抽象的関係（時空）」も抽象物でありながら再帰的な結びつきを作りやすいタイプの名詞だが、それらは（25）（26）に示したように、特に「火薬庫」や「視界」などの空間を表わす名詞は抽象度において連続性を有し、具体物との境界線が曖昧な場合が多い。そのため、その主格名詞の特徴も具体物のように目に捉えられやすくなり、再帰的な結びつきを作る傾向を示したのであろう。

（25）　1939年3月1日に**旧陸軍禁野火薬庫が大爆発を起こし**、約700人もの死傷者が出ました。（大阪府枚方市『広報ひらかた』）

（26）　黒木が電話を切るのを待ってから沙霧は受話器を静かに置いた。雪がやや小止みになって、**視界が明るさを増した**。（門田泰明『黒豹キルガン』）

第１次元の意味を考えるために、もう１つ考えなければならないのは先ほどとは逆の場合である。つまり、なぜ具体物よりも抽象物のほうが非再帰的な結びつきになりやすいのか、ということである。この問題に対しては非再帰的な結びつきの用例を提示しながらその答えを見つけよう。まず、主格名詞が抽象物の場合、その例は（27）～（31）のように、主格名詞と対格名詞が描いた事柄の因果関係が比較的に明確、または理解しやすいものがほとんどである。下の例では、屈辱から憎悪が生まれる理屈や、核戦争によって文明が破壊される経緯なども常識的に考えれば想像がつくものだと考えられる。

（27）　その十数年後である。**屈辱が憎悪を生み**、憎悪が野望を育んだ。その野望がユーラシアを流血の渦に巻き込み…（伊藤敏樹『モンゴルvs.西欧vs.イスラム』）
（28）　彼はビル・ロイスは生存主義者だと言っていた。**核戦争が文明を破壊する**のを待っている連中のひとりだと。（リック・ボイヤー『デイジー・ダックス』）
（29）　これまでの地球は**憎しみが対立を生み出し**、その対立がさらなる憎しみを生み出すという悪循環の中にありました。（中丸薫『闇の世界権力をくつがえす日本人の力』）
（30）　糖尿病などの生活習慣病と同様だ。**肥満が高尿酸血症をもたらす**メカニズムについてはさまざまな仮説が提唱されているが…（吉田和弘『健康診断の「正しい」読み方』）
（31）　これは**技術が民主主義を促進する**という楽観的な展望を述べたものであった。確かに、新しいメディア技術が…（ジョアンナ・ヌーマン『情報革命という神話』）

しかし、主格名詞が具体物の場合、その用例は（32）（33）のように、主格名詞と対格名詞が描写した出来事の因果関係は（27）～（31）と比べて少し分かりにくく感じられる。（32）（33）を理解するためには、それぞれ「テレビばかり見ている子は人よりもテレビのほうに興味を持ち、結果的に人と接するのを嫌う」「ＩＣタグに消費者の個人情報が内蔵され、商店はそれにアクセスすることが可能だ」などの媒介となる情報が必要である。これは、具体物が直接に「事名詞」に対して影響を与えることが物理的に困難であることに由来すると思われる。そのため、強い因果関係をそれほど感じられないことが多く、常にそれを補うための情報が求められる。（34）はその極端な例であり、なぜ足が未来を作るのかは、その本を読まないと理解できないものだと思われる。以上見てきたように、具体物は抽象物に比べて、「事名詞」に対して変化を及ぼす能力が劣っていることがうかがえる。

（32）『テレビに子守りをさせないで』という本の中で，**テレビが自閉症をつくりだす**という主張をし，テレビを消すことを提唱…（林進『コミュニケーション論』）

（33）　**ＩＣタグがプライバシーを侵す**と考えられるのは、商店などから消費者が買った後だ。（井上能行『ICタグのすべて』）

（34）　海野　弘（うんの　ひろし）1939年東京生まれ…（中略）…主な著書に『**足が未来を作る**』（洋泉社）…（海野弘『ウォーキングマガジン』）

もちろん、散布図の真中辺りに寄っている「G2具体物（物質）」のように、直接に「事名詞」に対して影響を与える能力をもつ特殊な具体物もある。ただこのタイプの名詞は（35）（36）のように、主格名詞と対格名詞が描写した事柄は、科学的な原理をもとにした比較的強い因果関係になっているものがほとんどである。

（35）　**ウイスキーが勇気をかきたてる**。勇気がないとフェリシアは言ったが、それは誤りだ。（ジョン・アップダイク『イーストウィックの魔女たち』）

（36）　**牛乳が吐き気を増す**場合には，カルシウムを補うために低脂肪チーズやカルシウム含有飲料などをとる．（小林正『ナースのための糖尿病療養指導テキスト』）

第１次元を検討することによって得られた結論をまとめると以下のようになる。具体物は目に捉えられやすい特徴が多いため、それ自体の動きや状態などの側面における変化を描写する再帰的な結びつきも比較的成立しやすいが、ほかの対象に抽象的な変化を及ぼす能力をそれほどもたない。一方で、抽象物はほかの対象に抽象的な変化を引き起こしやすく、非再帰的な結びつきを作りやすいが、目に見える特徴が少ないため、それ自体の動きや状態などの側面を描写する再帰的な結びつきにはなりにくい。

次に、縦軸（以下第2次元）について検討する。まず、図1を左と右の2つの部分に分けて見ると、左半分では上が「再帰変化」、下が「再帰出現」、右半分では上が「対象出現」、下が「対象変化」と、4つの部分に分かれていることが確認された。左半分は第1次元の検討により、主格名詞はほぼ具体物が占めているが、ここではさらに動詞との結合傾向を観察すると、「G1具体物（自然物）」は「再帰変化」と結びつきやすいのに対し、「G3具体物（身体）」「G5具体物（植物）」は「再帰出現」と結びつきやすく、そしてその間にある「G4具体物（機械）」は「再帰変化」「再帰出現」とどちらともよく結びつく傾向が見られた。その理由は、「自然物」のような動的なイメージが強いものは（37）（38）のように、その動きが変化したことを描写する用例が多い一方、「身体」「植物」などのような動的イメージがそれほど強くないものは（39）

（40）のように、その状態が出現したことを描くものが多いからだと考えられる。その中間に位置する「機械」は（41）（42）のように、動きの変化も状態の出現も両方よく現れている。

（37）　奥の小山へと目を向けると不意に**風が勢いを増した**。地表の雪が舞い上がり視界が五メートルにも満たなくなった。（浅倉卓弥『雪の夜話』）

（38）　おそらく何か警告を発しにきたにちがいない。**竜巻が方向を転換し**て、こっちに向かっているとでも？（アン・モロー・リンドバーグ『翼よ、北に』）

（39）　寝不足が続いていたある朝、鏡を見たら、左の頬が腫れていた。**歯ぐきが炎症を起こした**らしい。（阿木燿子『ちょっとだけ堕天使』）

（40）　ガラス窓を開け放したとき、さし込んでくる日光の強さを半分にしないと、**葉が日焼けを起こし**、生育が悪くなる。（江尻光一『洋ラン栽培コツとタブー』）

（41）　**プロペラが回転速度をあげた**。機は滑走しはじめた。シュトルヒは、ほどなくふわりと舞い上がる―東の空に消えていった。（草薙圭一郎『時空戦艦「大和」』）

（42）　6尺、約1．8メートル。［102］このあたりは十尋位の深度であるから、**深度計が故障を起している**とも思えぬ。（遠藤織枝『戦時中の話しことば』）

続いて、主に右半分を占めている抽象物のほうでは、「N1人間活動（心理活動）」「N2人間活動（生理活動）」「N4人間活動（経済活動）」「N5人間活動（言語文書）」「T1抽象的関係（事柄）」「T2抽象的関係（作用）」は「対象出現」と結びつく傾向があるのに対し、「N3人間活動（具体行為）」「N6人間活動（思想学問）」は「対象変化」と結びつきやすいことが実数のデータと散布図から観察された。同じ抽象物であるにも関わらず、異なる動詞と結びつくのはなぜだろうか。その理由は、自然法則に関係していると思われる。一般的に、「出現」とは、何らかの事象が起きる条件が揃っていればそれが自ら現れるような、自然法則に従う現象であるのに対し、「変化」とは、何らかの事象を安定した現状から別の状態に移すような、自然法則に逆らう現象である。つまり、何らかの新しい事象を「出現」させるより、既存の事象を「変化」させるほうが困難なはずである。そのため、「対象変化」と結びつきやすい主格名詞も、「対象出現」のそれに比べて相対的に影響力が大きいと考えられる。実際の用例を見ると、（43）（44）に示したように、「屈辱」「肥満」といった人間の内部に起こる「N1人間活動（心理活動）」や「N2人間活動（生理活動）」は「対象出現」の動詞との結びつきを多数作っているが、「対象変化」とはほぼ結びつかない。一方で、（45）（46）の「行動」「桶狭間」のように人間の外部に起こっている「N3人間活動（具体行為）」と、（47）（48）の「戦略」「法」のように人間の知的活動が1つの心的生産物としてまとまった「N6人間活動（思想学問）」は、「対象出現」のほ

かに「対象変化」ともよく結びついている現象が観察された。これは、人間の内部に起こっている心理活動や生理活動よりも、人間の外部に現れている具体的な行動または心的生産物のほうが、「事名詞」に対する影響力が大きいことを意味している。

（43）　その十数年後である。**屈辱が憎悪を生み**、憎悪が野望を育んだ。その野望がユーラシアを流血の渦に巻き込み…（伊藤敏樹『モンゴルvs.西欧vs.イスラム』）

（44）　糖尿病などの生活習慣病と同様だ。**肥満が高尿酸血症をもたらす**メカニズムについてはさまざまな仮説が提唱されているが…（吉田和弘『健康診断の「正しい」読み方』）

（45）　追求したいわけですが、その際に私が一言だけ言いたいのは、**行動が意識を変える**ということなんですね。（遠藤織枝『戦時中の話しことば』）

（46）　信康、亀姫の一男一女を挙げて、夫婦は琴瑟相和す関係だったが、**桶狭間が運命を変えた**。今川義元は永禄三年…（湯川裕光『安土幻想』）

（47）　エンジンチューナー、チーム、ドライバーの努力により**戦略が勝敗を左右する**ようになった（田中康二『ＡＵＴＯ　ＳＰＯＲＴ』）

（48）　離婚率が急増したためである。欧米では**法が離婚を抑制し**，日本では社会がそれを抑制すると言われるが，抑制原因を失つた欧米に比べ…（経済企画庁『国民生活白書』）

主格名詞の影響力に程度の差があることを物語る証拠がもう１つある。実数のデータを見ると、「対象変化」と結びつきやすい「N3人間活動（具体行為）」「N6人間活動（思想学問）」は、同時に「再帰出現」とも結びつくことがうかがえる。散布図でも、特に「N6人間活動（思想学問）」が少し座標の左側に引っ張られているのが見て取れる。実際の用例を見ると、これらはほとんど（49）～（52）のように、主格名詞が潜在的にもっている何らかの力が発揮されることを表わす結びつきである。潜在的な力が潜んでいるというのは、その主格名詞もそれなりにほかの対象に対する影響力をもたなければならないことになる。したがって、人間の内部に起こっている心理活動に当たる「想像」「悲しみ」のような、相対的に影響力の弱い主格名詞はこの種の結びつきにはなりにくいと思われる。

（49）　賞賜を軽くすると、それだけ**刑罰が威力を発揮する**。爵位の値打ちが高いのは、君主が人民を大事にしている証拠である。（商鞅『商君書』）

（50）　**鼻療が効果を発揮する**のは、蓄膿症、肥厚性鼻炎、鼻腔炎、アレルギー性鼻炎、鼻づまり、鼻水、鼻よりくる頭痛および頭重、である。（山崎光夫『日本の名薬』）

（51）　人間は、本能的に知っているの。**科学が力を発揮する**のは、ぼんやりと理解してい

ることをより明確にする場合だけ。（鈴木光司『生と死の幻想』）

（52）　私は、デフレが発生し、**金融財政政策が効果を発揮し**ない可能性があるとみている。（スティーブン・ローチ『超大国の破綻』）

6. 2. 中国語の結合傾向

本節では中国語の無生物主語他動詞文における主格名詞と動詞との結合傾向を考察する。日本語の場合と同様、表１のクロス表ではそれが観察しにくいため、コレスポンデンス分析を適用することにした。中国語のデータを解析した結果が図２の散布図となる。

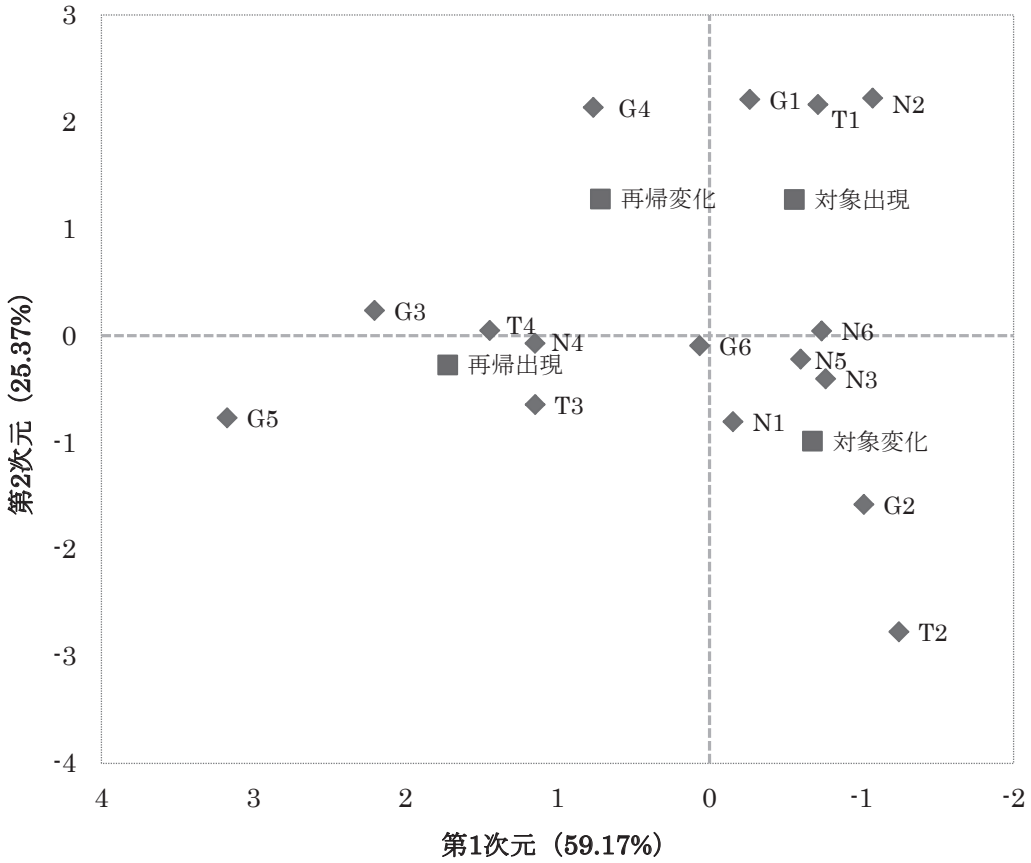

図２　中国語の散布図（第１次元と第２次元）

累積寄与率を見ると、第２次元までの数値が84.54%である。つまり、第２次元まで見れば８割以上のデータを説明できることになるため、第３次元は検討しないことにする。

日本語と同じ手順で図２の中国語の散布図[13]について軸（次元）の解釈を試みると、横軸（以下第１次元）では日本語とほぼ同じ結果が得られた。まず動詞のタイプ（第１アイテム）に注目すると、左側に「再帰変化」「再帰出現」が、右側に「対象出現」「対象変化」がそれぞれ配置され、ちょうど横軸の両側に分かれているため、第１次元は「再帰性」を表わしていると思われる。しかし、日本語と少し異なるのは、中国語の「再帰変化」が少し中央のほうに寄っており、日本語の場合に比べてそれほど結びつきを作らないことである。

実際に主格名詞別にそれぞれの再帰的な結びつき（「再帰変化」と「再帰出現」による結びつき）の割合を計算し、この解釈の妥当性を裏付けよう。まず、第１次元のもっとも左側にある「G5具体物（植物）」を見ると、その用例数が少なく割合がそれほど意味をもたないが、1例中1例が再帰的な述語と結合しているのが分かる。そして、同じ左半分にある「G3具体物（身体）」「T4抽象的関係（様相）」「N4人間活動（経済活動）」「T3抽象的関係（時空）」「G4具体物（機械）」はおよそ５～８割程度の比率を占めている。軸の右側に行けば行くほど、その割合も減っていき、中央付近の「G1具体物（自然物）」「G6具体物（道具）」「N1人間活動（心理活動）」は一応２～４割を保っているが、もっとも右側に集中しているグループはほとんど１割以下になっている。つまり、中国語の第１次元も「再帰性」の程度を表わし、「再帰性」が強いものほど軸の左側に並んでいることが、再帰的な結びつきの比率を検討することで再確認できた。

次に、主格名詞のタイプ（第２アイテム）にも注目しながら、動詞のタイプとの関係を観察する。日本語の考察では、主格名詞が具体物の場合、その側面となる特徴が目で観察されやすいため、それを対格名詞にして「再帰性」の強い動詞と結合する傾向のあることが確認できたが、中国語ではどうだろうか。図２を見ると、具体物である「G3具体物（身体）」「G5具体物（植物）」は（53）（54）に示したような再帰的な結びつきを作り、一応日本語と類似した傾向を見せたが、「G4具体物（機械）」「G1具体物（自然物）」は（55）（56）の再帰的な結びつきのほかに、（57）（58）の非再帰的な結びつきをも作る現象が見られた。これは「再帰変化」との結合傾向が弱いことにも関連すると思われ、詳細は第２次元で論じる。

（53）　治療後結疤（纖維化），或兩側上下**後臼齒窩發生潰瘍**（和訳：後臼歯が潰瘍を起こす），緩慢靠自身防禦的力量痊癒而産生深深的疤…（黄淑珍『如何戰勝鼻咽癌』）

（54）　新年嬉春，大台北綠色遊程繽紛！竹子湖海芋早開了，陽明山**國蘭放綻富貴春色**（和訳：蘭が春色を放つ），點點櫻、杏也為大地抹上春妝…（『民生報』2003年1月27日）

（55）　我臉紅脖子粗地回罵。現在，對我來講，最幸福莫過於**飛機出故障**（和訳：飛行機が故障を起こす），不是在天上，而是落到北京以後停飛。（王朔『空中小姐』）

（56）　夜似乎看穿我的心思，像看穿其他在它底下藏匿的人們一樣簡單，**風忽然增強力道**（和訳：風が勢いを増す）呼嘯而過，想吹熄我自身僅存的燭光…（kitaro『Lady Jane（2）』）

（57）　鄭逢時説，**森林火車出意外**（和訳：森林列車が事故を起こす），原本直升機應該去救人，結果救人的直升機反而出事…（『聯合晩報』2003年3月3日）

（58）　抗議市府核准建商在呉興街五十九巷底建大樓濫墾濫伐，擔心日後**豪雨會發生土石流**（和訳：豪雨が土石流を起こす），危害當地居民…（『中國時報』2001年10月19日）

一方、主格名詞が抽象物の場合は、作られた再帰的な結びつきは（59）（60）のように、対格名詞が目には直接に捉えられにくい「（心理状況の）変化」「（言語聴覚の）障害」に限定され、用例数もそれほど多くない。この現象も日本語と類似した傾向を示したのである。

（59）　在實際接觸到麻醉品後，自己也上了癮，**心理狀況起了變化**（和訳：心理状況が変化を起こす），終至不能自拔，臣服在麻醉品的威力下。（朱邦復『巴西狂歡節（五）』）

（60）　一眼看不清楚、**言語聽覺發生障礙**（和訳：言語聴覚が障害を起こす），這些現象通常幾分鐘、幾個小時便消失了而恢復原狀。（台灣學術網路BBS站「為什麼中風？」）

ただ、「T4抽象的関係（様相）」「N4人間活動（経済活動）」「T3抽象的関係（時空）」のように抽象物でありながら、少し散布図の左側に寄って、再帰的な結びつきを作る名詞のタイプも見られたが、これらは（61）（62）の「気温」「売上」のように数値で量化できるものや、（63）の「環境」のように具体物との境界線が曖昧なものなど、特徴が目で観察されやすいものがほとんどである。なお、日本語の「N3人間活動（具体行為）」も同じ理由で、「戦争が激しさを増す」のような再帰的な結びつきを作る傾向があるが、中国語ではそのような現象は確認されなかった。

（61）　今年夏天暑熱難耐，**気温迭創新高**（和訳：気温が最高記録を樹立する），不僅一般民眾吃不消，收容人更是受不了這股「酷燒」…（『中時電子報』1998年8月5日）

（62）　首先是**營業額創新高點**（和訳：売上が最高記録を樹立する）。大眾八十二年，首度突破百億元營業額，達一百一十八億…（『天下雑誌』1994年4月）

（63）　總之，O型－巨蟹座的人絶對不會因**環境產生變化**（和訳：環境が変化を起こす），而感到無所適從。（張老師「O型　巨蟹座」）

以上、主格名詞のタイプと再帰的な結びつきとの関係を見てきた。続いて、非再帰的な結び

つきとの結合傾向を観察する。図２によれば、主格名詞が抽象物の場合はほかの対象に影響を及ぼす「再帰性」の弱い動詞と結合する傾向があるが、その理由は日本語と同様で、具体物だと物理的に「事名詞」に変化や出現などの現象を引き起こす可能性が低く、その因果関係も想定しにくいからだと思われる。以下の（64）～（68）はどれも主格名詞が抽象物の例であるが、例えば他人と比べることによって欲望が生まれる理由や、風邪で副鼻腔炎が併発される関連性などの因果関係も常識的に分かりやすいものになっている。

（64）　比較的心理。知帯來比較，**比較産生各種慾望**（和訳：比較が各種の欲望を生む）。所以有些人心中很難平衡，這是第一種知，有它的優點…（傅佩榮『智慧』）

（65）　先傳訊包括周人蔘和林政男三員警在内的七名被告，但周人蔘卻突然以**感冒引發鼻竇炎**（和訳：風邪が副鼻腔炎を起こす）為由…（『中國時報』2003年2月20日）

（66）　因要避税，不能拿到銀行兌換，必須買東西消化。**消費帶動生産**（和訳：消費が生産を動かす），對刺激景氣最有效。（『中國時報』2002年2月5日）

（67）尤其中晩期患者的體質多屬氣陰兩虚，甚至陰陽兩虚，**温熱療法能加強體内循環**（和訳：温熱療法が体内循環を強める），使全身舒暢…（『聯合報』2003年3月10日）

（68）　並指這些例子可以被解讀為**氣候變化影響人類健康**（和訳：気候変動が人類の健康を影響する）的早期跡象…（『中時電子報』1998年8月12日）

それに対し、主格名詞が具体物の場合は（69）～（71）のように、なぜその因果関係が成立するのか少し考える必要があったり、その理解を促進させるための情報が求められたりすることが多い。特に（71）では、天体の運行がどのような理屈で人間の事務に影響を与えるのかを説明するのは極めて困難なのである。

（69）　人們可以更方便地做到他們在以前所想做的。**電話打破了隱私權**（和訳：電話がプライベートを侵す），同時，在某種角度下…（陳坤宏「『空間』的省思」）

（70）　有些報導説，**電動玩具會引發癲癇症**（和訳：テレビゲームが癲癇を起こす），不過大多數研究發現，這種遊戯有廣大的教育和治療效果。（『兒童日報』1993年7月1日）

（71）　幾乎每一家報紙都有此類專欄。美國總統雷根與其夫人皆深信，**星星能影響人間事務**（和訳：星が人間の事務を影響する）。（高涌泉『自然科學的邊緣與本質（1）』）

ただ、図2の散布図では、「G2具体物（物質）」のような具体物でありながらほかの「事名詞」に対し影響力を有する名詞もあるが、ここで考えられる理由は日本語と同じく、その事象が成

立する因果関係が科学的な原理に基づく比較的強いものであるからだと思われる。（72）（73）がその例である。

（72）　政府也不打算解除此一禁令，因為**避孕藥會帶來副作用**（和訳：避妊薬が副作用をもたらす），最近的原因則是可能會降低保險套…（董倩宜「日本女人性解放物語」）

（73）　鼻咽癌病友手冊－如何戰勝鼻咽癌。簡介：**放射線治療鼻咽癌**（和訳：放射線が上咽頭癌を治療する）的效果，已是不爭的事實…（黄淑珍『如何戰勝鼻咽癌』）

第1次元に対する解釈をまとめると以下のようになる。中国語における軸の解釈では、「再帰変化」の動詞がそれほど結びつきを作らない点を除けば、日本語とほぼ同じ結果になった。つまり、横軸（第1次元）が再帰的な結びつきと非再帰的な結びつきを分け、そして具体物が前者と、抽象物が後者と結びつきやすいという傾向である。ただ、それらの動詞と結合しやすい主格名詞のタイプは両言語において少し異なるところがある。

次に、縦軸（以下第2次元）について考察する。ここでも日本語と同じく、まず図2を左と右に分けて考えよう。具体物が多くを占めた左半分では、「再帰出現」は「G3具体物（身体）」「G5具体物（植物）」と結びつきやすいことが散布図を通して観察できた。その一方、「再帰変化」は一見「G4具体物（機械）」「G1具体物（自然物）」に近いように見えるが、表1の実数のデータも合わせて見ると、この2タイプの名詞は「再帰変化」よりも「対象出現」のほうと結びつくことが分かった。実際の用例を確認すると、「身体」「植物」のような動的イメージがそれほど強くないものは（74）（75）のように、それ自体の状態や特徴が出現したことを描く用例が多いのに対し、「機械」「自然物」のような動的イメージが強いものは（76）（77）のように、ほかの事象を引き起こしたことを描写する例がほとんどである。もっとも、「T4抽象的関係（様相）」「N4人間活動（経済活動）」「T3抽象的関係（時空）」も「再帰出現」と結びつくが、これらはもともと具体的な動きを起こせない抽象物であるため、動的イメージが弱いものとして捉えることができよう。ここまで述べてきたことをまとめると、日本語では、動的イメージの弱いものは「再帰出現」と、強いものは「再帰変化」と、それぞれ結びつく傾向があるが、中国語では、動的イメージの弱いものは「再帰出現」と結びつくが、強いものは「再帰変化」ではなく「対象出現」と結びつき、日本語と異なる傾向を見せる、ということが分かる。つまり、「再帰変化」による結びつきが少ないことが中国語の特徴と言えるだろう。

（74）　治療後結疤（纖維化），或兩側上下**後臼齒窩發生潰瘍**（和訳：後臼歯が潰瘍を起こす），緩慢靠自身防禦的力量痊癒而産生深深的疤…（黄淑珍『如何戰勝鼻咽癌』）

（75） 新年嬉春，大台北綠色遊程繽紛！竹子湖海芋早開了，陽明山**國蘭放綻富貴春色**（和訳：蘭が春色を放つ），點點櫻、杏也為大地抹上春妝…（『民生報』2003年1月27日）

（76） 鄭逢時説，**森林火車出意外**（和訳：森林列車が事故を起こす），原本直升機應該去救人，結果救人的直升機反而出事…（『聯合晩報』2003年3月3日）

（77） 抗議市府核准建商在呉興街五十九巷底建大樓濫墾濫伐，擔心日後**豪雨會發生土石流**（和訳：豪雨が土石流を起こす），危害當地居民…（『中國時報』2001年10月19日）

そして、今度はほぼ抽象物が占めた右半分の散布図に注目すると、「対象出現」と「対象変化」の2タイプの動詞がプロットされているのが見て取れる。日本語の考察では、「変化」は自然法則に逆らう現象であるのに対し、「出現」は自然法則に従う現象であるため、前者が後者に比べてそれと結びつく主格名詞の影響力が大きいことを述べた。実際の用例を確認すると、日本語ではごく一部のタイプの名詞を除き、ほとんどの抽象物を表わす主格名詞は「対象出現」と結びつきやすい一方、中国語では「対象出現」と結合しやすい抽象物は（78）（79）の「T1抽象的関係（事柄）」「N2人間活動（生理活動）」のみで、それ以外の「N6人間活動（思想学問）」「N5人間活動（言語文書）」「N3人間活動（具体行為）」「N1人間活動（心理活動）」「T2抽象的関係（作用）」はどれも（80）～（84）のように、より強い影響力を要求する「対象変化」との結びつきを作っている。この結合傾向をもとに、中国語は日本語よりも相対的に主格名詞の影響力が強いことが推測される。図1と図2の右半分を比較すると、日本語のほうでは主格名詞が圧倒的に上の「対象出現」に集中しているのに対し、中国語のほうではそれらが下の「対象変化」に集まっているのもその証左である。ここでも日中両言語において異なる傾向が見られる。

（78） **事件引起社會高度關注**（和訳：事件が社会の注目を引き起こす）後，簡又新在尚未釐清真相的第一時間，迅速批准領務局長詹憲卿辭呈…（『中國時報』2003年3月10日）

（79） 一九八八年一月六日，她因**氣喘引發心肺衰竭**（和訳：喘息が心不全を引き起こす），情況一度危急，卻執意不肯離開丈夫上醫院治療。（光華雜誌社「芳妻愛存」）

（80） 尤其中晩期患者的體質多屬氣陰兩虚，甚至陰陽兩虚，**温熱療法能加強體内循環**（和訳：温熱療法が体内循環を強める），使全身舒暢…（『聯合報』2003年3月10日）

（81） 但是這一類的訊息，當時臺灣的人卻無從得知。**報導刺激戰情**（和訳：報道が戦況を刺激する）？在戰情升高時，當時「日日新報」更…（陳淑美「臺灣篇」）

（82） 正在泡茶以去感冒！感謝苛征税猛説？匹普夫人**喝茶治感冒**（和訳：喫茶が風邪を治す）的功效，能不能像蓋若威先生的廣告那樣靈通？（王家鳳「茶葉西遊記」）

（83）　讓人從過去看到**理智改造環境**（和訳：理性が環境を変える）。只是這個智慧，究竟是實體的資料知識，還是歷史研究的規範標準…（清蔚園「為什麼學習歷史？」）

（84）　並指這些例子可以被解讀為**氣候變化影響人類健康**（和訳：気候変動が人類の健康を影響する）的早期跡象…（『中時電子報』1998年8月12日）

最後に、日本語では「対象変化」と結びつきやすい名詞のタイプは、同時に「再帰出現」と結びつき、「～が効果を発揮する」のような用例を作る傾向があるが、中国語でも同じような現象が観察された。以下の（85）～（87）がその例である。

（85）　為什麼不造反？回答是高壓**恐怖政策發揮了威力**（和訳：恐怖政策が威力を発揮する）。譬如據當時的政府副總理薄一波回憶…（台灣學術網路BBS站「人禍」）

（86）　最後由學校出面解決。我希望**校園刊物能發揮力量**（和訳：学校出版物が力を発揮する），請同學自我約束，不要再涉足這些場所。（政治大學「淡大附近有聲有色」）

（87）　軍方為了確保**救火行動能發揮成效**（和訳：消火活動が効果を発揮する），也曾在南部某基地附近開闢區域進行試投，效果還算不錯。（『自由時報』1991年1月）

7. まとめ

本稿の結論をまとめると以下のようになる。まず、対格名詞を「事名詞」に限定した場合、日本語と中国語の無生物主語他動詞文の成立においては、動詞の「再帰性」が共通の要因であること、また、各タイプの名詞がその性質によって、結びつきやすい動詞の種類もある程度決まっていることが分かった。次に、両言語の共通点として、主格名詞が具体物であればあるほど「風が勢いを増す」のように、目で直接に捉えられるそれ自体の動きを描写する再帰的な結びつきになりやすく、逆に主格名詞が抽象物であればあるほど「核戦争が文明を破壊する」のように、ほかの対象に抽象的な変化を引き起こす非再帰的な結びつきになりやすいことが挙げられる。そして、日中の相違点として、主格名詞が抽象物の場合、日本語ではほとんど「屈辱が憎悪を生む」のように、それほど影響力がなくても引き起こせる「対象出現」タイプの動詞と結びつくが、中国語では「理智改造環境（和訳：理性が環境を変える）」のように、より大きな影響力が求められる「対象変化」タイプの動詞と結びつきやすい点が挙げられ、主格名詞の影響力という面において日本語より中国語のほうが相対的に強い傾向が見られた。この現象は、Silverstein（1976）の名詞句階層における同じ種類の名詞句でも、言語によって異なる「活動性」をもつ可能性があることを示唆している。今後はさらにこの点について追究したい。

本稿では、連語論的アプローチとコレスポンデンス分析を用いて、日本語と中国語の無生物主語他動詞文を調査・分析した。しかし、これはあくまでも対格名詞を「事名詞」に限定した結論である。無生物主語他動詞文の全貌を見るためには、対格名詞が「物名詞・人名詞」の場合も合わせて考察する必要がある。また、今回の調査では主に文レベルの要因に焦点を当てたため、文章レベルの要因を考慮に入れなかった。この点に関しても今後の課題としたい。

注

1） 熊（2014）でも述べられているように、無生物主語他動詞文は文レベルだけでなく、文章レベルの要因も存在するが、本稿ではまず文レベルの要因に焦点を当てたいため、文章レベルの要因に関しては今後の課題にする。

2）「無生物」ではなく「非情物」という用語を用いるべきだと主張した研究もある（かねこ 1990）が、本稿では熊（2009）に従い、日中を比較する際により一般性が高い「無生物」を用いる。

3） 本研究で用いた「現代日本語書き言葉均衡コーパス」は、大阪大学文学研究科日本語学講座が国立国語研究所と交わした利用許諾契約に基づき使用したものである。

4） 本研究で用いた「現代漢語平衡語料庫」は、筆者が個人的に台湾の中央研究院と交わした利用許諾契約に基づき使用したものである。

5） 言語学研究会の用語で言うならば、ここではもともと「ガ格名詞」と称すべきだが、本稿では中国語も一緒に扱うため、便宜上「主格名詞」という呼び方に統一した。

6） 注5）と同様で、もともと「ヲ格名詞」と称すべきだが、本稿では「対格名詞」に統一した。

7） 言語学研究会（1983：206）に挙げられた「言葉を**振り回す**」や「非を**投げかける**」のように、具体的な動作を表わす動詞が比喩的に用いられたものも連語論では扱えない表現だが、今回抽出した無生物主語他動詞文の用例には特に見当たらない。

8） 言語学研究会では機能動詞という用語を用いず、単に「動詞がさらに抽象化して（中略）を格の抽象名詞を動詞化するという、どちらかといえば助動詞的なはたらきしかしなくなる」と記述しているが、機能動詞の概念とほぼ同じである。

9）「売り」のような、解釈によって同時に「具体行為」と「経済活動」との2つの分類になり得るものは「経済活動」を優先とする。

10）インターネットで公開されたフリー統計解析ソフトウェアである。

11）解の次元数は、行数と列数の小さいほうから1を引いた数になる。ここでは主格名詞が16タイプで、動詞が4タイプであるため、得られる次元数は3になる。

12）散布図では相対的な関係を示すだけで、絶対的な関係を示すわけではない。そのため、実数のデータも合わせて見ないと正確に解読できないことがある。

13）日本語の散布図と比較しやすいように、図2では中国語の散布図の横軸を反転して表示した。コレスポンデンス分析では、座標の相対的な位置関係が分析の際に重要視され、負荷量の正負は大きな問題ではないため、軸を反転しても解釈の結果は変わらない。

参考文献

Silverstein, Michael（1976）Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, Robert. M. W.（ed.）*Grammatical Categories in Australian Languages*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

奥津敬一郎（1967）「自動化・他動化および両極化転形―自・他動詞の対応―」『国語学』第70集

かねこ・ひさかず（1990）「非情物主語の問題から」『国文学解釈と鑑賞』第55巻第7号

言語学研究会（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

国立国語研究所（2004）『分類語彙表（増補改訂版）』大日本図書

鈴木康之（1983）「連語とはなにか」『教育国語』第73号

趙元任（1979）『漢語口語文法』商務印刷館

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版

仁田義雄（1985）「言語学研究会編『日本語文法・連語論（資料編）』を読んで」『国語学』第140集

麻子軒（2016）「連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照―コレスポンデンス分析による成立要因の検討―」『計量国語学』第30巻第7号

宮島達夫（2005）「連語論の位置づけ」『国文学解釈と鑑賞』第70巻第7号

森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院

熊鶯（2009）『鍵がドアをあけた』笠間書院

――（2014）「日本語無生物主語他動詞文の許容に影響を与える要因とその関係」『学習院大学大学院日本語日本文学』第10号

用例出典（文中に引用したもののみ示す）

【現代日本語書き言葉均衡コーパスDVD版 Version 1.1】阿木燿子（1998）『ちょっとだけ堕天使』講談社／浅倉卓弥（2005）『雪の夜話』中央公論新社／アン・モロー・リンドバーグ（2002）『翼よ、北に』みすず書房／石本祐吉（2004）『製造現場をたずねる』アグネ技術センター／伊藤達也（2003）『水資源政策の失敗』成文堂／伊藤敏樹（2004）『モンゴルvs.西欧vs.イスラム』講談社／井上能行（2004）『ICタグのすべて』日本実業出版社／海野弘（2005）『ウォーキングマガジン』第6巻第4号／海野弘（1998）『世紀末シンドローム』新曜社／江尻光一（1991）『洋ラン栽培コツとタブー』講談社／遠藤織枝（2004）『戦時中の話しことば』ひつじ書房／大阪府枚方市（2008）『広報ひらかた』2008年02号／大島渚（1993）『大島渚1960』青土社／大矢雅彦（1989）『自然災害を知る・防ぐ』古今書院／嘉治佐保子（2004）『経済学の進路』慶應義塾大学出版会／加藤久晴（1994）『傷だらけの百名山』リベルタ出版／門田泰明（1997）『黒豹キルガン』祥伝社／亀山早苗（2004）『男と女…』WAVE出版／嘉門安雄（2006）『高校美術3』日本文教出版株式会社／草薙圭一郎（2001）『時空戦艦「大和」』コスミックインターナショナル／栗田勇（2001）『白隠禅師の読み方』祥伝社／経済企画庁（1979）『国民生活白書』昭和54年版／小林正（2001）『ナースのための糖尿病療養指導テキスト』南江堂／堺屋太一（1985）『知価革命』PHP研究所／佐々木毅（2003）『宗教と権力の政治』講談社／佐藤学（2005）『教養教育は進化する』冬弓舎／沢地久枝（1986）『昭和史のおんな』文芸春秋／沢村凛（2003）『瞳の中の大河』新潮社／衆議院（1988）『会議録』第112回／ジョアンナ・ヌーマン（1998）『情報革命という神話』柏書房／商鞅（1995）『商君書』徳間書店／ジョン・アップダイク（1991）『イーストウィックの魔女たち』新潮社／鈴木光司（1998）『生と死の幻想』幻冬舎／スティーブン・ローチ（2003）『超大国の破綻』中央公論新社／高田宏（1997）『にっぽん風景

紀行』作品社／田中康二（2003）『ＡＵＴＯ　ＳＰＯＲＴ』第40巻第23号／田中貴子（2004）『古典がもっと好きになる』岩波書店／ダン・S・ケネディ（1999）『悪魔の法則』ティビーエス・ブリタニカ／中津文彦（2002）『塙保己一推理帖』光文社／中丸薫（2004）『闇の世界権力をくつがえす日本人の力』徳間書店／二条睦（2000）『監獄女医』角川春樹事務所／波勝一広（1995）『スリランカで午後の紅茶を』三一書房／林進（1988）『コミュニケーション論』有斐閣／マイク濱田（2003）『ドリアンの歌』文芸社／桝淵幸吉（1997）『薬の養生訓』小学館／Yahoo!ブログ（2008）『ビジネスと経済』／山崎光夫（2004）『日本の名薬』文藝春秋／山崎玲子（2002）『もうひとつのピアノ』国土社／山室恭子（1992）『黄金太閤』中央公論社／唯川恵（1995）『彼女は恋を我慢できない』集英社／湯川裕光（2002）『安土幻想』廣済堂出版／吉田和弘（2002）『健康診断の「正しい」読み方』平凡社／リック・ボイヤー（1989）『デイジー・ダックス』早川書房／ロバート・ウィルスン（2005）『セビーリャの冷たい目』早川書房

【中央研究院平衡語料庫 DVD 版 Version 3.0】kitaro（2003）『Lady Jane（2）』聯合文學／中時電子報／中國時報／天下雑誌社（1994）『天下雑誌』1994 年 4 月号／王家鳳（1995）「茶葉西遊記」『光華雑誌』1995 年 7 月号／王朔（1984）『空中小姐』中国青年出版社／台灣學術網路BBS站（1995）「為什麼中風？」／台灣學術網路BBS站（1996）「人禍」／民生報／光華雑誌社（1999）「芳妻愛存」『光華雑誌』1999年6月号／朱邦復（1994）『巴西狂歡節（五）』時報／自由時報／兒童日報／政治大學（1995）「淡大附近有聲有色」／高涌泉（1998）『自然科學的邊緣與本質（1）』中研院社科所研討會／張老師（1994）「O型　巨蟹座」『張老師』張老師文化／清蔚園（1999）「為什麼學習歷史？」／陳坤宏（1993）「『空間』的省思」『空間雑誌』1993年号／陳淑美（1995）「臺灣篇」『光華雑誌』1995年10月号／黄淑珍（1995）『如何戰勝鼻咽癌』臺大醫院防癌中心／傅佩榮（不詳）『智慧』行政院勞工委員會／董倩宜（1996）「日本女人性解放物語」『美麗佳人雑誌』1996年11月号／聯合報／聯合晩報

（博士後期課程学生）

（2016年8月17日受付）
（2016年9月30日掲載決定）